

## 視点 「志」

国土交通委員会 専門員

いはら こうたろう  
伊原 江太郎

列車の中でも人目を憚らない行動、或いは地べたに座り込み携帯電話に熱中する行動等は珍しい光景ではない。今や人としての自覚は薄れ、大人も子供も傍若無人な振る舞いをして羞じることが少なくなったのであろうか。今日では、一家の大黒柱である父親の役割の変調を契機に、家族の枠組みに綻びが生じているうえに、更に女性の社会進出などの要因も加わり、世の家族機能の変化の様相を呈し、とりわけその影響が色濃く出たのは、子供の養育と評する向きもある。

子供の養育を巡る状況や環境変化の実情が調査され始めたのは今に始まったことではない。これまで行われた多くの調査結果に指摘されている共通点は、家庭における躰が難しくなり、賢明に生きていくうえで基本的な要素とされる良き生活習慣、根気・忍耐力の強さ、意志の強さ、物を大事にする心、公共心や社会的規範などが身につけられないことが主な点として挙げられている。また、その理由については、子供に対する過保護、甘やかし、過干渉、躰や教育に自信の持てない親の増加、学校や塾など外部教育機関に対する過度の依存と責任転嫁、親子の触れ合いの不足等とされている。

このように次世代を担うべき子供が幼少期から人間形成のために不可欠な教育を受けにくくなり、このため子供が生来有する豊かな個性と創造力が涵養されないばかりか、社会性をも習得できないということになると、将来、成人した後どのような事態を招くことになるのかということぐらい誰にも想像はつくのではないか。

そもそもこうした事態を招いたのは我々大人たちの責任であろうが、この半世紀の間に一体、何をしてきたのか振り返ると、兎に角、敗戦の混乱から立ち直り、そして生計を立てるために懸命の努力をしてきたことは事実である。しかし、戦後の奇蹟とまで言われ、国中が思わぬ成功の美酒に酔いしれる中、最も肝心な将来の基盤づくり、即ち「人づくり」を疎かにしてきたという結論に帰着するのであろう。その結果、我が国の社会経済システムの構築・維持に微妙な狂いが生じ、徐々に足元を蝕む事態が静かに進行していたと思われる。

明るい未来を描いていたころとは一転、余りの変わりように心配も尽きない現下の日本であるが、我々はこれまで必要とされる道理を後回しとし、また無理を押し通した結果、民心を傷つけ今日の混迷を招来したということであろう。その象徴的なものとして道徳観やモラルの欠如と思われる取り返しのつかない事件が実に多いことである。その背景には諸説あるが、これまで人生観・道徳観について説いたものの、説かれる者が説く者の虚偽を感じ取りその面従腹背があったということが推測される。道徳について辞典の意を訳すれば、現実に即しつつ理想を仰ぎ、更にこの理想を現実化しようとする人間の行動といえよう。これが欠けるとやがて民衆は窒息するばかりか、その極に至っては狂態を演ずる恐れがあることはこれまでの歴史が証明しているから実に怖い。

規律ある生活の維持、そして後世存続のための道筋を開かねばならなくなっている今、我々は現実を正視し、理想の光を仰ぐ深い知恵と意志をもって、もう一度気持ちを奮い立たせ、チャレンジする以外に生きる道はないものと、その思いは高まるばかりである。